

## “眼疾患に伴う幻視”

Abell, T. :

幻視を呈した注目すべき症例

Truman Abell : Remarkable Case of Illusive Vision

[Boston Med Surg J. 33 : 409-413, 1845]

訳：田崎 博一（弘前大学附属病院神経精神科助手）

本論文は、1845年、書信の形で寄稿されたもので、著者は、アメリカ New Hampshire 州の Lampester という小さな町に住む当時66歳の内科医 Truman Abell である。59歳の時、突然に襲った視力障害に端を発す彼自身の体験を、彼は科学者としての目で克明に記録していった。それは、彼の知識では説明し難く、驚きに満ち不思議な体験であり、それ故、彼はその現象を記載するにとどめ、病態の解釈については、編集者、あるいは、後世の我々を含む読者にその解明を求めたのであった。

彼の体験した幻視は、今日でいうところの幻覚症、Ey, H. の熟語を用いれば幻覚性エイドリ－ (les Eidolies hallucinosiques) に分類されるものであり、これは感覚器官と知覚分析器の解体として捉えられている。また、眼球、視神経、視交叉など、末梢の視覚路の障害のために比較的急性で重症の視力低下が起こると幻視の出現する場合のあることが知られている。これは18世紀、ジュネーブの博物学者 Charles Bonnet が祖父の体験した幻視の自己観察記録を報告したことになんで、Charles-Bonnet 症候群とも呼ばれている。この幻視は色彩と活発な運動性を持ち、不定型の物体から景色、動物、人物など具象的なものまでテーマが種々であること、開眼、光刺激、眼球運動などで幻視が開始したり変化したりすること、患者が病的な体験であるという自覚を持つことなどいくつかの特徴を持つ、比較的稀な現象である。Abell の体験した幻視はこのカテゴリーに属するものであろう。この幻視の出現には、眼疾患という末梢感覚器の障害、それに伴う感覚遮断の状況、視覚系における解放現象、視力障害に対する不安などの心理的因子、さらには中枢の機能障害といったいくつかの要因が関与しているものと考えられる。頻度こそ多くはないが、感覚機能の障害とそれに伴う異常感覚の出現という現象のモデルとして興味を持たれる病態である。

（田崎博一）

拝啓

この書信の内容が、十分に興味深いものであらんことを望んでいる。そうであれば、個人的にはお会いしたこともない貴殿に読んでいただくことのおおびになると考える。というのも、貴殿が自然科学の発展に常に興味を持っておられることを存じあげているからである。

私の知る限りではこれまで誰にも記載されたことのない種類の、最も注目すべき、稀なる症例である。私は、1802年から1804年の間、動物磁気作用（動物体内に生じ他の動物に移入し得ると考えられた仮想神経力）や骨相学的隆起が人間の運命を決定するとは、まだ考えられてい

なかった頃、内科医としての教育を受けた。私は、私の性格と嗜好の導くままにこの人生を歩んできた。また、時には興味や良識を、ためらうことなく犠牲にすることも何度もあった。しかし、私は内科医としての、そして科学者、および、道徳家としての名声を保ってきたと信じている。私は体力がなく徐脈であり、病気がちな体質であったが、1838年、59歳になるまでは何も特別な事は起こらなかった。その年、私は右目の視力が落ちているのに気がついた。最初は煙がかかったようで、その前で、まるで回転しているような動きで黒い点が踊っていた。電灯をつけずに寝室にはいると、時々、昼間のような明るさになった。美しい壁紙が貼られているようであったが、現実とは異なっていた。手を壁の上に置こうとすると、そこには何もないのである。

病気の徴候はないにも関わらず、まもなく左眼の視力がまるで視覚の軸を横切るように歪みはじめた。やがて、視力は衰え、1842年、完全に失明してしまった。痛みや炎症などは全く伴わなかった。この状況の中で、私はしばしば、私の視力が回復し、とても美しい風景をみている夢を見た。ついに、これらの風景は覚醒しているときにも細密画のように見えはじめた。数フィート四方の小さな野原が現れ、それは緑の草や花をつけた植物で被われていた。それらは、2、3分間続きやがて消えるのだった。床に入った直後に最もしばしば現れた。

1843年の秋の間、夕刻、ストーブのそばに座っていたとき、私は、腕の中に眠った乳飲み子を抱いて私の横に腰掛け婦人の姿をみた。2、3分の後彼女は姿を消した。さらに、私は、私の側に立って私の顔を見つめる小さな子供をみた。その部屋には子供はいないのであるからそれが幻覚であるのはわかっていたはずなのに、その光景はあまりに自然で、私は手を差しのべてしまった。

1844年1月25日頃、体の調子はいつもと変わらなかったが、「内なる視力」による事物の発見が始まった。部屋はとところどころ明るく、種々の植物が見えた。この光景は数日数夜続き、次に灰色の馬が見え始めた。馬は、いつも私の横に立ち、手綱をつけ、ばりばりとはみを噛み、そして、急に立ち上がるかの如く頭をぐいと持ち上げた。この光景は3週間、毎日続いた。2月20日頃、人が見え始めた。時にたくさんの男女、さらに、かつて正常の視覚において見た全ての種類の動物や鳥が見えた。どんなに暗い夜も、これらの生物を見ることを妨げはしなかった。私の部屋はいつも、彼らの顔の表情を識別するのに十分な程明るかった。彼らはしばしば私の枕元にやってきて、私の上でかがみこみ、私の眼をのぞきこむのだった。どうしてもそれから逃れる方法はなかった。眼を閉じても、頭を抱えても役に立たなかった。この幻覚状態は4月3日まで続いた。約10週間、これだけの期間に現実の中ではこんなに多くの人々と動物を見たことがなかった。生物以外にも、私は、芸術作品やたくさんの種類の植物などをみ、これらの幻覚を見ている間、私は、2つか3つある窓のあたりで、部屋の壁を通して明るい陽の光と緑の草で被われた大地の面を見ることができた。時にこれらの窓は大きくなったり数が増したりして、あたかも壁全体がなくなり、戸外に放り出されたようであった。

3月23日の晩のことだった。その日は、昼から夕方まで友人達から厳しい検査を受けたのだが、午後10時頃、私は雄牛の群れが押し寄せて来るのを見て驚いた。しかし、慌てず静かに座っていると、群れは私に触れることなく通り過ぎた。数分後、私の前の壁がなくなり、私は陽の光が届かない夜の残留者と別れを告げた。しかし、私の見えるものは限られていた。つまり、推し量るところ15~20エーカーの南に傾斜する丘陵の斜面に位置するところ以上には、見ることが許されないのだった。その範囲はしっかりとした壁に囲まれ、4つの区画に分けられていた。

私の近くに大きな石造りの納屋が建っていた。野原には草をはむ牛が見えた。一頭の大きな雄牛が、私に近づき、そして納屋の方に歩いて行った。私はまんじりともせずにその夜を過ごした。そして、翌朝にはすっかり疲れ果て、私の眼は弱ったようになり、開くことができなかった。同様の光景はその後幾晩か繰り返したが、3分間しか続かず、その間、老人が腕に籠を抱えて私の方に歩いてくるのも見えた。その老人は中庭の方へ向きを変え見えなくなった。もっとよく見ようとすると、いつも、光景全体が消えてしまうのであった。

これらの幻覚において、観察できた特徴のひとつとして、最初の10週間、頭、顔、少し下の肩を除いては人間の姿を見ることができなかったことが挙げられる。体の他の部分は闇の中に隠れていた。人間の全体像を最初にみたのは、ある朝、目覚めて頭をベッドの上の方に向けたときのことだった。多数の男性、女性、そして何人かの子供が4列に整列し、列はベッドの頭の所で始まり西の方へ遠く見えなくなるまで延びていた。彼らは皆同じ方向を向き指揮者の声を聴いているように見えたが、私には何も見えなかった。婦人はさまざまな帽子やボンネット、ずきんなどで着飾っていた。男は何も飾りをつけていなかった。15分か20分間で彼らは列をくずし消えてしまった。私はある晩奥の部屋を歩いていたが、開いた扉を通して明るい小さな部屋が見えた。しかし、私は実際にはそこには何も無いことを知っていた。部屋の中央には一人の婦人が立ち、暖かい着物を着て、フロックコートとずきんをつけていた。彼女は最初、ちらちらと私の方へ眼をやっていたが、やがて、顔をこちらに向け肘掛け椅子に腰を下ろした。彼女の表情は分からなかった。3分くらいで明りが暗くなり、彼女は消えた。

4月3日以降は、あれほど見えていたはっきりとした光景は殆ど何も見えなかった。6月18日まで、何物も、人の顔すら見ることなく一日一日が過ぎた。さて、その6月18日に、私の周囲をいろいろな動物が見え、そして以前見たことのある灰色の馬が頭を輝かせていた。この時、私は、場所を変え、話相手を変えることによってこれらの視覚を止められるのではないかと願い、娘の家を訪れるために少しの間出かけた。しかしながら、この試みはうまくいかなかった。最初の晩、床にはいると、静かだが厚かましい訪問者たちに苦しめられた。彼らは遅くまで眠りを妨げた。二日目の夜、彼らはさらに押し入ってきた。しばしば3、4匹が私のベッドに近づき、私の顔をのぞき込んだ。その夜は嵐で暗かったが、これらの生物が現れるときは、いつでもそれらをはっきり見ることができるよう十分に明るかった。僅かの眠りの後、夜中の2時頃目が醒めた。すると、部屋は真昼のように明るく、男と女であふれていた。彼らは、私のベッドのあちこちに腰掛け、15~20人は立っていた。彼らは、時々私の方に目をやったり、互いに顔を見合わせて笑ったりしていた。朝になって、家族が上がってきたとき、私はベッドを離れ、「着替えるために、2、3人どけて場所をつくらなきゃ」と言った。次の日、私は家に戻り、以来、7月4日まで不思議で、驚くべきことが続いた。私はその十分の一も描く自信はない。夜となく昼となく現れる大勢の人間の他に、ものすごい数の馬と馬車を見た。ある時、一人の紳士が2頭の灰色の馬車の引く4輪馬車で私の側にやってきた。彼は、降りて2人の婦人を馬車に乗せると軽やかに南の方に立ち去った。私は、半マイル進むくらいの時間、彼らの立ち去った方向を見ていた。彼らは私の視覚の限界である薄暗がりの中へ消えていった。別の時、ある夕刻、乗合馬車が南西の方向から走ってきた。それは、私の横をさっと通り過ぎ、宿屋の前に止めてある何台かの馬車と合流した。それらは止まって、持ち主が道路を整理できるのを待っていた。何台かを前方に動かし、その他は馬を止め、3分くらいで整理が終わった。御者は降りて馬具を取り付けたあと、馬車に戻り乗り出した。

1945年2月8日の朝、午前2時頃、目を醒まし、明りがとまりたくさんの男女であふれた部屋をみた。彼らは度々私の方を振り返り、そして、時に私の所にやって来ては私をよく知っているかのような顔をするのだった。しかし、私は彼らが邪悪に源を発していると感じているので、厳めしい、冷淡な眼差しを返すのだった。それに対して、彼らの表情は変わり、まもなく引き上げるか、消えてしまうのだった。私は、シャツの裾をまくりあげ、あたかも仕事をしている様に見える男たちを畑や納屋の近くに見ることができた。私は、その日いっぱい、明らかに気が進まないといった様子で私の側を通り過ぎる大勢の人をみていた。彼らは、暗い建物か小屋に向かい、そこで姿を消すのだった。次の晩は、私は同じ時刻に目を醒まし、南に向かってなだらかな勾配を成す広大な平原を見た。その表面は完全に平らで、堂々としていた。私は南の端にいるような気がした。そこで、北の方からやってくる兵士の連隊の全景をみることができた。彼らが到着した時には、その数は数千にも増えていた。彼らの服は目も眩むばかりに華麗だった。彼らの動きは概ね素早かったが、中には跛行を呈す者もあった。2列になり、互いに向かい合い、その列は見える限りの遠方に広がっていた。彼らは次にばらばらに隊列を崩し、異なった方向に整列した。時々、大勢の前で互いにぶつかり合った。私は、大勢の小さい子供の集まりがその隊列の前や後ろで、飛び跳ねているのを見て、異様にうきうきしていた。彼らの多くは、真紅の飾り帯をつけ、淡い青の上着を身につけていた。これらの光景は、一日中、夕暮れ近くまで続いた。野原は、夜10時過ぎに人影が無くなり、私が振り返った時には、彼らは南の方に移動し消えてしまった。

次の1週間、私はいつもどうりの時間に目が醒めていた。そして、それまで体験したことのない新しい光景を見た。明るい街と私を取り囲む巨大なレンガの建物があり、それは今にも崩れそうで、下の方には暗い穴や半円系の穴がある。そのあたりで、人が動いているのが見えるのだった。所々に商店が見え、カウンターの後ろにはそれぞれ店員がいた。しかし、客の姿はなかった。道路には、馬に跨った男、荷を引く馬達、犬、種々の鳥、あらゆる種類の機械が見えた。

13日の夜、前に述べた平原は、馬に跨って西へと向かう数えきれない程の男たちで埋めつくされていた。それらは、数時間にわたって続き、列の幅は少なくとも半マイルあった。15日には同じ隊列が戻ってきた。14日の晩床についた後、私は周囲の街の最も興味深い光景をみた。建物は、数階の高さのまだ新しい骨組みからなり、外装はまだできていなかった。私は一つの骨組みの上に100人の人間が乗っているのを数えることができた。彼らは屋根の梁を引っ張っていた。時々、通りは、木の骨組み以外は何もなくなり、見通せる限りはるかまでがらになるのだった。

これらの中で風変りなものとして、回転する車輪が挙げられる。それは、馬車の車輪の役目をしているようだった。車輪は本体の内側に位置しており、私には、小さな窓を通して車輪の一部の端しか見えなかった。機関士はいつも車輪の外側に立っていた。彼の顔が窓の所にくると車輪が止まり、機関士が降りてきた。一方、1人から5、6人の客は車輪の内側から外に出るのだった。それぞれは荷物を持ち別々の方向に歩きだした。この出来事は、3日間に3、4回繰り返された。その間、その時間を待って20～30人が集まるのだった。私の見た、様々の動く物体の中で、その動きは兵士の行進と反対行進のような、ごくわずかの例外を除いて右から左の方向だった。同じ方向に2つの物体が動くのを見るのがよくあった。一方が他方よりも速く動き、通り過ぎるのであった。これらの動きのもうひとつの特徴は、眼球の動きに対して

ある部分は一致して動くが、同時にその他の部分は固定していることであった。

私がここで述べてきたことは、これまでの幻視に関する知見に一致せず信じ難いと思われる。しかし、それはまぎれもない真実であるばかりでなく、この内容は15日間私の見たことの忠実なスケッチである。最も興味深い多くのことについて、私は十分に言葉にすることができない。このような状態をもたらしたことに、視力障害がどの程度関与しているかについては、私は分からない。

人間の精神を小宇宙、あるいは宇宙の小画像とする古くからの比喩を、以前の私は、理解することができなかった。2月9日に見たような軍隊の戦術の誇示が20時間にわたり、最大級の活動性をもって続いたこと、そして、私以外には世界中の誰も見ることが出来ないということなどは、私にとっては、本当に驚くべきことであった。すべては視知覚に関連する器官に限られ、おそらく、1インチ四方の十分の一よりも小さな部分しか占めていないという考えは、私を納得させるものではなかった。この先いつか、この不思議で神秘的な精神の哲学とでもいうべき科学の分野になんらかの貢献をすることができればいいという希望以外には、経験を記録する他の動機はなかった。そして、私は、あなたの意見を頂き、何か助言を頂ければと思う。もし、この症例がそれに値するのであれば。

敬具

New Hampshire 州 Lempester にて  
1845年12月7日

Truman Abell